

勇物語

夏目ユウリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

直江津高校三年生阿良々木暦は夏休みの終わり突如として別世界に飛ばされる。

しかもそこは世界が滅びかけた終末世界で――――――

青春は勇気なしでは終われない。

物語シリーズと勇者であるシリーズの『のわゆ』こと乃木若葉は勇者であるとのクロスオーバーです。

ぶつちやけ見切り発車です。ちょくちょくプロット的なこんな話を書きたいなどかこういう展開にしようかなとかぐらいです。

書くまい書くまいと思ってたけど妄想が募りすぎてなんか文に起こりちゃった感じです。

終わる気がしない。

目 次

プロローグ

阿良々木暦は転生者である。其ノ壱

阿良々木暦は転生者である。其ノ弐

阿良々木暦は不審者である。其ノ壱

阿良々木暦は不審者である。其ノ弐

阿良々木暦は終末世界を知る。其ノ壱

阿良々木暦は終末世界を知る。其ノ弐

阿良々木暦は終末世界を知る。其ノ参

プロローグ

勇者とはなんだろうか。最近僕はふとそんなことを考えてしまう。
釈明しておくと決して遅まきながらの厨二心に目指せたとかそんなことではなく、（というか僕にそんな時期はなかつた……たぶん）話を戻そう。

この高校三年生の大事な夏休み。普通の受験生ならば分け目もふらずに勉学に勤しむのが当たり前であろう。無論戦場ヶ原や羽川のお陰で勉強の方も進んでいないわけではない。宿題はしてなかつたけど。

しかし、決して普通の人がしないような体験も僕はしてしまつた。それこそ春休み——地獄のような春休みと僕は今まで形容してきた春休みと同等の怪異体験をしてきた。

蜂に刺された大きい妹——阿良々木火憐

不死鳥そのもの小さい妹——阿良々木月火

『梅の木二中のファイヤーシスターズ』というなんだそりやと言わざるを得ない異名で呼ばれているこの二人は正義の味方そのもの。具現者である、らしい。

もつとも僕から言わせればそれはただのごっこ遊びであり、正義でもなんでもない。ただの自己満足なのだ。

……まあこの手の話は本家偽物語で散々したからここでいちいち語り直すのはよすとして

冒頭でも言つた通り『勇者』という存在は果たしてなんなのだろうか。こんなことを他の人に話せば勇者は勇者でしょ。この一言で済まされてしまうだろう。

それを否定するつもりは一切ない。

だからこそ僕は勇者とはなんなのか、もつとわかりやすく言うとどうすれば『勇者』のようなカツコいい正義の味方になれるのか。ということを考えているのだ。

それこそ火憐、月火たちと同じ頃、もつと言えば幼稚園、小学校の頃であろうか。

僕は『勇者』に憧れていた。いわゆるゲームやアニメ、それこそ絵本なんかに出てくる勇者に。

どうして憧れたのか。理由は特に覚えていないし、おそらくそんな大した理由があつたわけでもないのだろう。僕はそんなやつだ。今でも、未だに。

でも僕は勇者を憧れてはいたけれど知つてはいなかつた。

もつと言うと果たして勇者が一体どんなことをする人なのか、よくわかつていなかつた。

現実にはドラゴンや魔王なんていないしそれこそどつかの爺さんや婆さんがいきなり現れて「お前が勇者になるのだ」なんて言つてくることはない。

今この一ーー曲がりなりにも、あくまで表面上はきつと平和であるこの世の中わざわざ勇者なんてものが働くタイミングもないし、必要もない。いらぬ存在。

が

愚かでろくに考えることもしない僕はだから一ー人助けをすることにした。

なりふり構わない無尽蔵の人助けをしようとした。今でこそ信じられないし、信じたくもないが当時の僕は本当にそうすることで自分が憧れていた勇者という存在に、正義の味方みたいなやつになれるとはいわなくとも、せめて近づくことぐらいはできると思つていた。

しかしより現実を知つたことで、世の中にはできることとできないことがあると知つたことで、むしろそんな過去の自分がなんだか無性に滑稽で第三者から見たらなんか無駄に必死なおかしな奴だつた僕が嫌になつた。

僕の今の人格を形成している人よりも捻くれている部分はそういうところの残り香みたいなものだ。

あとは直江津高校の勉強についていけなくなつて普通に落ちぶれたりつてのもあるけど。

要するに中途半端なのだ。

高校三年生にもなつた僕は現実をある程度、少なくとも過去の僕よ

りは知つていて、それでもまだ、未だに、性懲りも無く、それこそ未練たらしくもそういうものに対して何か捨てきれないものが心の何処かにあるのもわかつてゐる。

その結果がこの高校三年生の春休みから夏休みまでの過程なのだ。

そして僕はきっとこれからもこの中途半端さを抱えて自己嫌悪に陥りながらも、失敗しながらも、苦しみながらも、失いながらも

きっと、行動することをやめられない。

彼女たちを

勇者たちのことを見つめていたるほど

僕は人間ができるいないのだから。

阿良々木暦は転生者である。其ノ壱

異世界転生なんて言葉を最近よく聞く。

なんの変哲も無い人畜無害の一般人の少年が突如異世界に転生されて神さまからもらつた特典だなんだを使つて無双だのなんだの、はたまた死んだら一定の時間にまで戻るとかなんとか。

まあ色々だ。ちなみに僕は結構ラノベも読む。異世界ものも転生ものも嫌いじやない。もつとも最近はそれも種類が増えに増えにきてなかなか選別が難しいものではある。面白そうと思つたものをいちいち買つっていたのではバイトもしていない親からの小遣いでやりくりしている高校生は速攻で破産である。

最近の出費の半分近くを時にはそれ以上を占めているのが忍のミスド代というのもあるのだが。

というか忍のやつドーナツはミスド以外邪道だみたいなこと言ってなかつたつけか?こないだまたまクリスピードーナツを買ってつたら文句言いながら食べてやがつたからなあの金髪幼女。

自分の言つたことを平気で曲がるなよ。キャラ変更を安易に行えるのは斧乃木ちゃんだけで十分だ。

閑話休題。

いかん、いかん。

すぐにどうでもいいことを考え始めてしまるのは僕の悪い癖だ。悪癖だ。巷で噂の幼女趣味以上の悪癖だ。(そもそも僕は認めていないのだが)

異世界だ。異世界。

そうだつた。そうだつた。全く本当に困つたことだ。現実は現実として受け入れなければならぬってこないだ戦場ヶ原に言われたばかりじやあないか。

何事もまずは受け入れるところから始まるものだ。そこから咀嚼して飲み込んで。身体中に浸透させる。

そうして行動に出るのが大事だなのだ。

状況把握。冷静沈着。

明鏡止水のごとく心を研ぎ澄ませるのだ。そして高らかに叫ぼうじやないか。

叫び声には定評のある僕だが、今回は特にいい叫び声が生まれそういうある。いやはやいやはや。何事も経験しておくものだ。人生何があるかわからないものである。

今の僕は普段以上に吸血鬼性が高いけれども。

「ハハハどこだよつ!?」

異世界転生していた。

さて、簡単に事の顛末を話しておくこととしよう。夏休みが終わるのに夏休みの宿題が終わっていなかつた。そこで忍の力を借りて時を数日遡ろうと考えたのだ。さながらドラえもんのタイムマシンのように。そう、ノブえもんだ。やっぱ中の人、それも初代っぽいな。それで数日前に戻ってきたはずだつたのだが

なんか全然違う世界に来ていた。

それもいわゆるベタな異世界ものの中世ヨーロッパ風な感じ、獣人があるとか荷馬車が後を立てて走っているとか、衛兵風の人がいたとかそんなんじゃない。

その名の通りの異世界。この世の理に反している世界。

木やつるなどの植物と思わしきものがそこらかしらに生えており

サイズも色もおかしい。平氣で人のでかさを悠々とこすサイズ感に奇妙な色合い。

空の色もなんだか不気味で仕方がない。夜といえば夜のようだがそれでもどこか明るい。

上を見上げれば空が遠く感じる。というのも実際に僕が今いる地面が低いのだ。

通常ではあり得ないような高低差。

そして、何よりきになるのは

「……星…？」

暗い空にうつすらとではあるがポツポツと点々のように何かが見える。これも普段以上の吸血鬼化による賜物だろうが。

「いや、あんな星あるか？それになんかどんどん数増えてる気がするし」

なんだ。一体何がなんだかわからない。状況把握能力向上の術を羽川にもつと教わつておくんだつたか。

流石の羽川でもこんな状況に陥つたら流石に困惑するだろうか？

実際問題困惑しているのは僕だけだ。

「歩いてみるか…」

人間何事も足からと誰かが言つていた氣がする。とにかく歩いてみよう。フイールドワークだ。

ふむ。それにしたつておかしな光景だ。空は相変わらず星に埋め尽くされてるししかもなんか動き回つてないか？

おまけにその一つが落ちてきてるし。
ん？

星つてそんなやすやすと落ちてきていいもんだつけ。

親方！空から女の子が！

じやあないんだから。某ジ○リ監督もびつくりである。てかあの
人こそ口リコンだろ。僕は女性の範囲年齢が比較的、他社よりも、多
少広いだけの青少年である。

だいいち彼女があんなんだし。口リの口の字も無いような女の子

だしなあ。

それにしても——戦場ヶ原以来だろうか。上から降つくる女の子を抱きとめるというのは、勢いが違すぎるけど。というか戦場ヶ原はめちゃくちや軽かつたしな。

隕石が落ちてくるときつとこんな音がするのだろう。大地を穿つように一本の筋が降り注ぎ地面をえぐり轟音が響いた。

僕からしたら音どころではないのだが。死にそう。

「いつ……………つあ……………」

人間本当に困惑した時、痛い時などは声が出なくなるものだというがされは本当だ。今僕が証明した。

強いて言うならうめき声なら出た。

「いてて…早く戻らないと！」

そんな状態の中少しづつ意識が再覚醒していく中で声が聞こえてくるのがわかつた。

僕とは違つてその声はとても霸気に満ちていて、よく通る声だった。

というか落ちてきた女の子だった。

え、まじでラ○ユタ？シータってこんなんだつたつけ？

「勇者は根性！」

しかも、そんな掛け声とともにその少女は飛び去つてしまつた。文字通り。ものすごいジャンプ力だつた。

あれシータめっちゃ元気じやん。やつぱりジ○リ特有の元気系少女ヒロインだつたのか。

「どうか…僕、置き去りか…」

パズーの立場としてはなんだか複雑なものだつた。

てか勇者とかなんとか言つてたような。まさかとは思いたいが、吸血鬼性が増している今の僕は普通なら聞き取れないような音もある程度聞き取ることができる。

「勇者、勇者…？」

もうしばらく聞いてこなかつた単語だつた。正義の味方に明け暮れているあの二人ですら使わない、子供じみた称号。

本来なら、なんか痛い子がいるな。程度で済む話なのだが、あいにくそれを聞いてしまつたのは僕なのだ。

かつては正義の味方、そのトップに立つと勝手に思い込んでいた『勇者』に憧れていた阿良々木暦だつたのだ。

そんな未だに子供じみたものを引きずつているのか、それすらもわからぬが、とにかく僕は出会つたのだ。

この世の闇を振り払う存在に。光として人々を守り導く

「勇者」に

僕は――巡り合つたのだつた。

阿良々木暦は転生者である。其ノ式

いやそうじやないだろ。

というか何も解決していない。

そもそもあの子は誰だ？なんかとても人間とは思えないジャンプ力で飛んでつたけど。貴重な第1村人に話を聞くことすらままならないとは……

「さて、どうしたもんか…………あ」

そうだ、そうだ。こんな時に頼れる相棒か僕にはいたじやないか。周りに誰も頼れる人がいなくともこいつにだけは頼れる、そんなまさしく一蓮托生な相棒が。

金髪幼女の吸血鬼 忍野忍がいたんだつた。

やれやれ、全くだ。春休みからの経験で僕も少しは成長して落ち着いた対応が取れていると思つたけれどどうやらまだまだかもしれない。

六百年生きている吸血鬼の怪異である忍ならこんな意味不明の状況に対してもなんらかの経験談からアドバイス、又は解決策を提示してくれるかもしれない。そもそも事の発端は忍がタイムマリープを提案してくれたことが始まりなのだし。

それに忍は僕の陰に潜んでの生活の前はあの学習塾跡の廃ビルで妖怪変化のオーソリティ自称する忍野メメから数々の怪異譚を聞いているはずだ。その中に役に立つ知識があるかもしれない。

そうと決まれば善は急げ。

僕は自らの体から伸びる影を見下ろしながら話しかける。

「おーい、忍。ちょっといいか？」

返事がない。ただの屍のようだ。吸血鬼だけど。

.....

忍のやつもしかして寝てるのか？

たしかに忍は基本的に寝ている時間が多いため、正確には日中は寝てあることが多いがそもそも今が夜なのか、どうかすらこの状況ではわからない。

「まあ、呼びかけ続ければそのうち気づくか」というわけで根気強く呼びかけることにした。

「…………あれ？」

おかしい。いくら呼びかけても全く、これっぽっちも反応がない。普段だつたらいくらい日中でもこれだけしつこく呼びかけられれば否が応でもでもそれこそ渋々出てくるはずだが。

奥の手のドーナツあるぞ作戦も不成功に終わるし。

一体どういうことだ。……というかそもそも忍はもしかして影の中にはいない…？この世界のどこか別の場所に離れて飛ばされてしまったとかそういう感じか？

だが僕と忍はペアリングでつながっているはずだ。つまり忍は僕の陰から離れることはできないはず。

「いや、御託を並べても仕方がないか。とにかく今は忍とも連絡がとれないんだ。…だつたら現地人に話をこちらから聞きに行くしかないな」

そう思った矢先だつた。

先程から見えていた星？みたいなものがいくつかこちらに向かつて迫つてくるのが見えた。

吸血鬼化が高まつた目でその星？をよく見つめる。

「へえ知らなかつた。星つて顔と口がついてるのか」

おそらくこんなこと、星に詳しい戦場ヶ原や『なんでもは知らないわよ。知つてることだけ』の羽川でさえも知らない新事実だろう。

「ツ!!」

僕はとつさに走り出した。何も急に気がおかしくなつたとかではない。ただ一ーー察知しただけだ。なんとなく。根拠もないが

あれは危ないと。

普段以上に吸血鬼化している体をフルに使つて走る。

「つくそ！」

思わず悪態を吐く。星かと思つていたものがまさかのわけのわからぬ化け物だつたのだ。しかもかなりのスピードで僕を追いかけてくる。

チラチラと後ろを確認するが間違いなく少しづつだが距離が詰められている。追いつかれるのも時間の問題だ。

改めて忍が不在なのが痛い。彼女がいてくれたらどれだけ心強かつたか。というか物理的に強いしな。あいつ。

「ええい！ ままよ！」

今いないやつのことを考えていても仕方がない。腹を決めて体に急ブレーキをかけて化物と向き合う。僕も化物なのは変わらないが。化物は何匹かの集団で一直線に襲いかかつてくる。そこにフォームーションとか陣形みたいな概念は感じられない。

とにかく全部とともにに戦おうとしないでまずは退路を確保する。それからあの第1村人（勇者）の女の子を探し出す！

そう覚悟を決め不格好ながらも戦闘態勢をとる。僕が止まつたことによつて化物たちとの距離は一気に縮まる。

そして肝心の戦闘方法だが、——なんてことはない。

「吸血鬼パンチ———！」

拳で十分だ。というか拳しかなかつた。だがそこは伝説の吸血鬼の眷属パワー。先頭の化物を文字通りぶん殴り吹っ飛ばす。

だが化物はまだまだいる。全然全く油断はできない。化物たちは我先にと突撃し噛み付こうとしてくる。

てかこいつら噛んでくるのかよ……怖ッ！
化物たちの攻撃を紙一重になんとか避けながら応戦——したいのだがそう簡単にうまくいかなかつた。

一匹一匹を撃退しようとすればさらにもう一匹にやられる。普段以上に吸血鬼化している今の僕の回復力がどの程度のものなのか定かではないが、回復を待つてくれるはずもあるまい。
となると何か戦い方を考えなければならない。

僕はそのチンケな頭で考えを巡らす。

どうせ僕に高度な技術なんて発揮できないし、戦術も戦略もない……だつたら単純明快にやるしかない！

「ツらあ！」

片足を軸にしてバランスをとりながら片腕をぶん回す。さながら吸血鬼スピンドル。名前のセンスは許してくれ。

センスはともかくとして周りの化物たちを一気に攻撃することには成功した。

すると化物たちは攻撃するのを躊躇し始めた。

しかしそれは新たな危険を表している。化物たちが僕の周りを取り囲み始めたのだ。

取り囲まれるのはまずい。そもそも僕はさっさと離脱したいのだ。
とつさに逃げ道を探す。そして見つかった。

「躊躇してる暇はないか……！」

僕は顔を持ち上げ天を見上げる。そこはまだ化物たちに塞がれていない退路だつた。

意を決して膝をぐつと屈め一気にジャンプする。包囲を向け出すことに成功した。

「つて飛びすぎたあああ!?」

自分が思つていたよりも飛んでしまい焦りに焦る。というかあの化物たちは空を飛べるんだからこのままでは普通に追いかけられて食われる。

さらにバツの悪いことになぜか目の前に突如として馬鹿でかい板のようなものが現れた。

このままじゃ化物の餌になる前に衝突死不可避だ!!

こうなるとやれることはただ一つ。

吸血鬼パンチでの馬鹿でかい板をぶち割るしかない!!
さながらピツコロ大魔王を倒した時の悟空のように!

僕はサイヤ人でもなんでもないがな!

「一回で効かないなら…百回だつて千回だつて叩き続ければいい！」

あれ?この声…どこかで………というかついさつき聞いたような…。

「千回い———！連続勇者パ———ンチ!!」

僕のかざした拳よりも先にその板を攻撃する拳があつた。しかもその拳は一回ならず、文字通り本当に千回ぐらいあるんじやないかと思わせるほどの連續パンチで板を叩き割つた。

ガラスのようにバラバラに碎け散り僕が板に正面衝突するなんてことは免れた。

しかしそこには側から見たら攻撃しようとして空振り、体が宙に投げ出され、落下していくなんともダサい男の姿があつた。というか僕だつた。

なんとか着地を…！

と、思ったのだが不安なことに僕の体は背中を地面に向けて落ちていつてゐる。この体勢では無事に着地などできやしない。

そしてそのまま重力に従い僕の体は背中から地面に激突―――することにはなかつた。

で見渡す。

「大丈夫ですか!? どこか怪我は!」

僕は先ほど僕に激突してきます女の子とはまた違う子に抱きかかえられる体勢で受け止められていた。というかこれは完全にお姫様抱つこの体勢だつた。

そんな…………まだ彼女にだつてしたことないのにい!!

顔を見つめてくる。

「あ、えーっと。うん。怪我とかは特に」

「そうですか……よかつた…………ところで貴方は……」

女の子の表情が安堵から疑惑、又は困惑にすぐに変わる。

いふ 仕事に一歩も着り

それに僕は今この子に助けられたのだし。

後々のことも考えてとりあえず名前ぐらいは名乗つておいても差支えござりません。

挨拶は大事だ。古事記にもそう書いてある。

「僕は阿良々木暦。見たまんまの男さ」

阿良々木暦は不審者である。其ノ壱

私こそ乃木若葉と四人の勇者たちの戦いが始まった。

敵が侵攻してきたことによつて起こつた樹海化の中でバー・テックスと私たち勇者は戦つた。

初めは変身できない者、変身できても戦うことができない者もいた。だが、仲間からのアドバイスもあり無事に皆が戦線に参戦することができた。

そのまま順調に敵の数を減らしていくと何体かのバー・テックスが集まり進化体となつた。

我々の攻撃が効かない中、切り札の使用を迷つていたところを友奈がいち早く飛び出し切り札『一目連』の使用により進化体を無事に倒すことに成功した。

そして我々四国勇者の初陣は無事に勝利で終えることができ

―――――――たのだが。

なぜが人がいた。この樹海の中には私たち勇者以外の人間はいないはずだし、樹海化している時は外の時間は止まつているはずだから外から入り込んでくることもできるはずがない。

しかし私の目にははつきりと叫び声をあげながら宙を舞い落ちていく人の姿が見えた。

「危ない……！」

私はとつさに飛び出しその人在空中でキヤツチすることに成功した。

その人は男の人で、私の腕の中でなぜが悔しそうな表情を浮かべていた。

そして名をこう言つた。

「僕は阿良々木暦。見たまんまの男さ」

私はおかしな人だと思った。

始めたあつた人との会話において何より大事なのはやはり自己紹介なのだと僕は思う。

僕は自慢じゃないが友達が少ない。（マジで自慢じゃなく少ない）

だがそれはいい。友達の多さをあたかも自らの戦力の高さかのように表現する奴は僕が嫌いなタイプだ。何が偉いのかわかつたもんじゃない。

まあこれでも春休みの頃までは『友達はいるない。人間強度が下がるから』なんてことを言つていたことを鑑みると多少はまともになつたと思いたいのだが、それにしたつてやはり僕はなんというか、友達作りとか対人関係のスキルがまだまだ低いんだなと思わざるを得ないのだ。

そうでなきや普通初対面の女の子に見張られ、おまけに鎌を突き出される状況などにはならない。一々のかもしれない。

「えーっと、喋つてもいいかな……？」

椅子に座られた状態で恐る恐る口を開く。

すると黒髪の伸ばした女の子に冷たい目で睨まれたまま無言の「NO」をいただいた。

やめてくれ。Mに目覚めたらどうする。ただできえ僕は知り合いの女子に冷たい目を向けられがちなんだ。

ちなみに僕はMじゃない。冷たい目を向けられたり冷たく話しかけられたりして興奮したり喜んだりしない。

そんなの八九寺オンリーだ。：忍と斧乃木ちゃんも追加しておこう。

「ぐんちゃん…あんまり睨まないあげて。ね？」

赤毛の少女が隣で黒髪の子をいさめようとしている。有難い。この子はまだ話が通用しそうだ。

「高嶋さんがそう言うなら…………」

どうやらこの子は赤毛の子に対して弱いようだ。あからさまに態度が変わった。もうグ렁렁렁。神原でもここまで露骨じやないぞ。

「すみません。我々としてもこんなことは本意ではないのですが」

先程僕を助けてくれた子が申し訳なさそうに一言。先程からの会話を聞いている限りどうやらこの子が集団のリーダーのような存在のようになっていた。

「若葉ちゃん、大社と連絡が取れました。迎えが来るまで拘束した状態で見張つていてくれとのことです」

「そうか…ありがとうひなた」

「いえいえ」

おお……リーダー格の子ともう一人の紫髪の子のこの会話はなんだ。一見ただの会話にしか見えないが、そこに見え隠れするまるで結婚何十年目かの熟練夫婦のような雰囲気。

というかなんか物騒なワードが聞こえてきたんだけど。拘束？

え、また？ついこの間彼女にされたばかりなのに？手錠つて思つてた以上に鬱陶しいんだよなあ。あれ長い時間されるの結構憂鬱な

んだけど。

僕はちらつと視線を逸らして窓ガラスに向ける。そこには先ほどとは打つて変わった空模様があつた。もつともこつちの空が僕が知つてゐるごく普通の空だが。

あの後一いつまり僕が金髪の子に抱きかかえられた後あの不思議な光景は崩壊し通常の世界が戻つてきた。

そして僕はそのままなぜがお城の中に連れてこられ、そしてなぜがあつた教室の中で現在椅子に座らされている。別に強制的に脅されてるとかじやないが、状況的にはそう言つて差し支えないだろう。「ど」を見ているの……逃げようとしているのなら……

「ぐんちゃん！ストップ、ストップ！」

…どうやら目線も動かさない方がいいようだ。

「にしても本当に不思議だよなあーなんだ勇者でもないのに樹海の中で動けるんだ？」

変わつた髪型をしている小さめの子に頬を指で突かれる。

「ちょっとタマつち先輩……危ないよ……」

「なんだよ杏。平氣だつて。な？これだけ勇者がいるんだ。反抗なんてできやしないさ」

「でも……」

「わーかつた。わかつたよ。杏は心配性だなあ」

大人しそうな子に言われて突つつくのをやめる変わつた髪型の子。てかマジで初めて見るな。月火ちゃんで結構いろんな髪型を見てきたつもりだつたんだけど。あいつすぐ髪伸びるし。

「別に構わないよ。頬を突かれるのには慣れてるからね」

「無駄な発言は許可していないわ」

怖。更生前の戦場ヶ原も思い出すようだつた。

「…阿良々木さんと言いましたか」

リーダー格の子がどこか訝しげな視線を向けながらも一步踏みより一言。どうやら名前は覚えていてもらつていたようだ。

「ああ、あつてるよ。僕の名前は阿良々木暦だ」

「ですか。誠に申し訳ありませんが阿良々木さん、あなたをこれ

から迎えに来る大社に引き渡さなければいけません。それまでの間あなたにはここでおとなしくしていてもらう必要があります」

初対面の人に対する敬意を忘れないとともに不審者である僕……僕としては認めたくないが不審者とされている僕に甘さを見せないようにしているのが伝わる。

よくできた子だ。うちの妹たちに見せてやりたい。あとは後輩とかにも。

「それはわかつた。どうやら僕はこの状況ではかなり怪しい存在らしいからな。——ただ僕個人としては何も君達と対立したいわけでもないし特別何か企んでいるわけでもないんだ」

「そんなの簡単に信じられるはずがないじゃない」

まあ……ですよね。言葉で言うのは簡単だからな。でも今の僕には言葉で言うしかない。それしか方法がない。

たいしや？とかいう組織か何かに連れていかれる前に少しでもこの世界のこと、そしてこの子達のことを知つておいた方がいい気がするのだ。

とても人間とは思えない動きをし、化物を倒していた彼女たちはきっと何か特殊な事情を知つてている——————んじやないかという希望的観測をしているのだ。

今僕が何より気をつけなければいけないのは身の振り方。とにかく敵意がないことを示すことができればいいのだが……

どうも僕に対する感情は三者三様というか……

「とりあえずまずは君達の名前を教えてくれないか。会話をする上で相手の名前を知つておくことは大事だろう？」

対話をする上で互いの名前を知ることはとても大事なことだといつぞやのアロハのおっさんが言つていた気がする。あいつこそまさしく不審者な気もするんだが。

「それは——そうですね」

一瞬悩みながらも承諾してくれた。なんとか次のステップに進める。

「乃木さん……そんな簡単にこの人の要求をのんでいいわけ……？」

「千景、気持ちはわかる。だが私たちとしても情報が欲しいのは山々だ。まずはとにかく互いのことを少しでも知る努力をしなくてはいけないと私は思う」

「……それが何かの罠だとは考えないわけ？」

僕めっちゃ狡猾な奴だと思われとるやん。そんな貝木みたいなまどろっこしいこと僕には不可能なんだけどなあ。

「もちろんそういう危険性も考慮した上での対話だ。内容は選ぶさ」「千景は気にしそうだつて。とにかくやつてみないと何も始まらないぞ。な、杏？」

「え…う、うん…」

「ぐんちやん。私もそう思うな。とにかく話してみないとさ、相手がいい人なのか悪い人なのかわからなーいよ。それに大丈夫！きつと阿良々木君は良い人だよ！」

「友奈さんはどうしてそう思うんですか？」

「うーん…………なんとなくかな！」

「ふふ、友奈さんらしいですね」

「どうだ千景？まだ何か不満があるか？」

「……わかったわよ」

「ありがとう。そしていざとなつた時は頼む」

「……ええ。一瞬で切り刻んでやるわ」

今僕の不死性どれくらいなんだろなあ……首チヨンパされたら戻るのだろうか……まあそれはともかくとして

「ありがとう。感謝するよ」

「じゃあ私から言うね。どうも！高嶋友奈っていいます！14歳です。好きな食べ物はうどんです。よろしくね」

「じゃあ次はタマだな！タマは土居球子だ！タマも14歳だぞ。よろしくなーああとアウトドアが趣味でうどんが好きな食べ物だぞ」

「えつと…じゃあ次は私で。伊予島杏です。14歳で趣味は読書で好きな食べ物はうどんです…よろしくお願ひします…」

「では次は私が。初めまして、上里ひなたといいます。私も14です。

それから…そうですね、趣味と言えるかわかりませんが家事は結構好

きですね。それから好きな食べ物はうどんですね」

「では——私は乃木若葉といいます。歳は14で好きな食べ物はうどんです」

「……郡千景……14歳……うどんは好き……」

「え……………ん？」

うどんの人気高すぎやしないか？そんな白米レベルで国民食だったか？別に僕も好きだけど。

というかみんな14歳かあ。……中学生かあ。僕が知ってるまともな中学生が千石ぐらいしかいないせいでなんだか不思議な感じだ。いや……言つちやなんだか千石も多少変わった子ではあるのか？月火ちゃん」と仲良いくらいだしな。

「なるほど、え一つと高嶋ちゃんに土居に伊予島ちゃんに乃木に上里さんに郡ちゃんか。よし覚えたぞ」

どうでもいいけど乃木つて斧乃木にちよつと似てないか？

「なあ阿良々木」

「ん、どうかしたのか？」

「なんで6人の呼び方がちよくちよく違つたりするんだ？」

「…………なんでだろうな？」

「理由ないのかよ！」

「まあなんとなくだな。特にこれといった理由はないよ」

「ふーん。そんなもんか」

「そんなもんだ」

「じゃあそんなもんだな！」

「何言つてんだ」

「なんでだ!?」

なんかこいつちょっと火憐ちゃんみたいだな。サイズ感がだいぶ違うけど。頭が撫でやすそうなところにありやがる。妹たちがもつと小さかつた時のことを思い出すようだ。あの頃は良かつた……そうでもねえや。あいつらあの頃から生意氣だつたわ。

「……」

「？ なんだよ？」

「ほん

なでなでなで

「……」

互いに黙った状態のまま数秒の時が流れる。土居は状況を理解できていないのかぽかんとした顔をしている。ふむ、性格の割にはちやんと髪のケアをしてるんだな。もしかして伊予島ちゃんあたりにやつてもらってるのかかもしれない。

僕はこれでも火憐ちゃんや月火ちゃんの髪はいじつたことや洗つたこともあるし、少し前には羽川のあの神々しい三つ編みを恐れ多くも僕の手で切らせていただいた。

女子の髪に關しては一言提言するぐらいの経験は積んできてる。そして無事に初めてこの世界に来てから確かな情報を手に入れることができた。なんかこんな言い方すると本当に僕が何か悪いことを企んでるみたいだな。

とはいいい調子ではある。こうして普通に会話ができるいるのは僕としてもやりやすいし。

「おい…」

しかしこうなると僕側からも何か言つておいた方がいいか？

「おいつて…」

一方的に僕に対して情報をくれるとは思わないし、少しでも信頼を勝ち取るためにはやはりこちらの手の内もある程度見せねばなるまい。

「なあ…」

しかし一体何を話すべきか。まさかいきなり別の世界から来ましたとも言えないしなあ。

「あのぉ……」

視界の外からふと声をかけられる。伊予島ちゃんだった。なんだか苦笑いを浮かべている。まるで何か指摘しにくいことを指摘しようとしているような。

「どうかした？」

「えっと…あの…手を」

「手?——あ

そこでようやく気がついた。うつむいた状態でなおかつ僕のことを見下す土居の顔に。

「さつさと離せバカああ————！」

前言撤回。そんないい調子でもないかも。

阿良々木暦は不審者である。其ノ式

女子の頭を撫でるのに別段抵抗はない。結局は慣れなのだ。

僕の場合は幼少期から火憐ちゃんや月火ちゃんの頭を撫でてるし、幼女、少女、童女こと忍、八九寺、斧乃木ちゃんの3人もいる。

だから僕にとつては何も特別なことじやないし、決して深い意味はないのだ。もつとも女子の頭を撫でることにじやあ興味はないのか？と聞かれたらはつきりとNOと答える。

まだ僕は多くの人材を残しているからな。戦場ヶ原や羽川なんてどう攻略すればいいか見当もつかない。

この際直接『撫でさせてくれ』と言えば済む話なのかもしれないがやはりそこはもう少しスマートにいきたいものだ。

でも僕、こないだの眼球舐めたい発言で羽川に少し警戒されてしまつたんだよなあ。

というか今の状況のままじやそもそもあの一人に会うこともままならないわけか。

これはどうしたものか。髪を切つてイメチエンした彼女と恩人の姿をじっくり眺めることもできないとは、くそつ！一体全体誰の仕業なんだ！この転生騒動は！

僕はただ夏休みの宿題がしたかつただけなのに！

「やれやれだぜ。全く」

「タマの方がやれやれだぞ…」

「なんでだよ？ そんな嫌だつたか？」

「別にそういうわけじやないけど……どう反応すればいいのかわからなかつたんだよ」

「でもタマちゃんちよつと気持ち良さそうだつたように見えたよ？」

「伊達に女子の頭を撫で続けてはいないよ」

「どんな人生だよ。てか気持ち良いなんて思つてないぞ！」

「土居。無理しなくていいんだぞ。僕はいつでもウエルカムだ」

「タマの方がウエルカムじやない！ だつたら友奈の方を撫でてみろよ！」

「え？ 私？ うーーん。わかつた！」

え？ いいの？
(歓喜)

これでより僕の経験値が増えるぜ。マイスターへの道は近いな。

「た、高嶋さん!?ダメよ！絶対ダメ！」

「え、何で？」

「こんな不得体の知れない不審者……何を企んでるかわからないわ」
「人聞きが悪すぎるっ!!」

「人聞きが悪すぎるわ!!」

「黙りなさい。不審者！」

やめろ。かたでこの辺のことを多観唱はれりしてくるやつが多
いんだ。これ以上増やしてなるものか！」

「そこ」まで言われてるんだ……」

「若葉ちゃん。私の頭も撫でてみませんか?」

「元談ですは♪」
いきなり何を言いだすんだひなた!?

「文部省」

「たかしまあああああああん——!?

二〇一〇

[...]

呆気にとられた表情のまま固まつてしまつた郡ちゃんを尻目に高嶋ちゃんの頭を撫でる。途端に周りが静かになるのは何故だろう？

そのせいで何かいけないことをしているみたいだ。千石のブルマ姿を思い出すな。しばらくの間神原と語り合ったのはいい思い出だ。今もそのブルマは阿良々木家に羽川のパンツとともに家宝としてしつかりと保管されている。

てかそろそろいいか。

僕は手を高嶋ちゃんの頭から手を離した。ちなみに僕としては大満足だつた。いい仕事をした気分だ。

「あ…」

「ん？」

なんか今聞こえなかつたか？

「どうだ友奈？どうだつた？」

土居が高嶋ちゃんに詰め寄る。お前どんな立場なんだよ。

「へ……あ、うん」

高嶋ちゃんはどこかぼーっとした感じだつた。もしかして僕の腕から電磁波とか出てた？ ポケモンさながらの電気ショック流れてたらする？

「どうしたの高嶋さん!! どこか具合でも悪いの!? やはりあの不審者に何か……！」

「なんもやつてないって！ 頭撫でてただけだつて！」

「友奈さん？ どうかしましたか？」

「何かおかしなことがあつたのか？」

「ううん。違うのひなちゃん、若葉ちゃん。えつとなんかね、難しいんだけどこう……ふわああ～～～って感じだつたんだ」

「あ、そうそう、それだ！ タマもそう思つたんだ！ それだと友奈！ ふわああ～～～だ、ふわあ～～～」

「タマつち先輩それつて、気持ちよかつたつてことなんじやないの？」

「え？ そうなのか？ う～～ん。わからん！」

「一種のマッサージのようなものなんでしょうかね？ 若葉ちゃん」

「なんらかのリラックス効果があるのかもしれないな」

「何を呑気に解説してるのは乃木さん！ こいつは不審者なのよ!? 素性も知れないこんな男が高嶋さんの大事な体を触るなんて…………許せない……」

郡ちゃんに向けられる視線がどんどん鋭さを増していく。くそ！

八九寺にもつと冷たい目で見られ慣れとくんだつた！

「それに貴方も貴方よ……自分が今どんな状況なのかわかっているのかしら……」

たしかに僕は今拘束されてる状態なんだつた。一応。あと鎌やめて。

マジで先端部分当たりそう。

「あれはあくまで土居に煽られた結果であつて決して僕個人としての趣味嗜好は含まれていないよ。……だからどうか鎌を下ろして改めて対話をしよう。僕たちはまだ分かり合えるはずだ」

でもたしかに郡ちゃんの言うことももつともではある。どうやらおしゃべりはここまでにしてここらかはマジな対話モードに切り替えた方が良さそうだ。

どうも僕にはあまりシリアルスなイメージがもたれていないようだけどそんなことはない。シリアルスもできるつてところを見せてやろうじゃないか。

「さつきは僕が君たちの名前を教えてもらつたからね。今度は君たちが何か聞いてくれて構わないよ」

良好な信頼関係を築くためにもギブアンドテイクを心がける。一方的なのはどちらにせよよくない。羽川が言つてた。

ちなみに戦場ヶ原は『でも聞き出せるだけ聞き出してあとはさっさとトンズラでくるならその方が良くないかしら?』とか言つてやがった。あいつ本当に更生したんだろうな。

「はいはい！」

土居が元気よく手をあげる。いや、手を挙げられても僕にさす権利ないんだけど。

「若葉ちゃんとどうします？」

「そうだな……では一人一回質問していくつてそれを回していくことにしよう? 大社が来るまでそう時間もないだろうしな」

「じゃ、タマからだな。学年は?」

「中三だ」

「え、年上だつたのか」

「バリバリ年上だ」

「ふーん、ま、別にいいか」

「おう、ちゃんと先輩つて言えよな」

「えーー阿良々木先輩つて呼ばなきやいけないのか?」

「おおいいじやないか。よしそれで頼む」

よし、これで神原成分が多少なりとも補給できる。ちなみにめちゃくちゃ普通に嘘ついたのは少しでも年齢差をなくそうと思つてのことだ。流石に高校三年生と中学二年生というのは彼女たちからしても僕からしても間に溝ができるやすい気がした。

今溝がどうとか言つてるけど嘘をついていることが一番溝を作る要因じゃないかとも思つてきた。早速選択をミスつたかもしけない

⋮

「じゃあ…あの…趣味はありますか……？」

「なるほど、趣味か……」

「あの…そんな無理に答えてくれなくともいいですよ……？」

「いやいや、大丈夫だよ。そうだね…本は比較的読むほうかな。あとはアニメとともにそれなりには」

「どんな本を読みますか!? 小説は?! ジャンルは?! 恋愛系つて

……………あ……………」

伊予島ちゃんはそこから顔を真っ赤にして俯いたまま黙つてしまつた。なぜか土居にめっちゃ睨まれた。僕悪くなくない?

どうやら伊予島ちゃんは本がかなり好きみたいだ。確かに彼女の物腰柔らかで落ち着いた雰囲気には合つているように思える。そう考へると見た感じ正反対の土居と仲が良さそうなのはどういうことなのだろうか?

「では次は私ですね。先程若葉ちゃんにお姫様抱っこをされていましたが…感想のほどはどうでしようか?」

「おいひなた!」

「最高だつた。危うく惚れるところだつたぜ」

「阿良々木さん!」

実際あれはかなりイケメンだつた。僕に戦場ヶ原というおつかない彼女がいなかつたら危なかつたかもしない。

「次は私が。：好きな麺類は？」

「ん？ 麺類は確定なの？ 好きな食べ物とかじやなくて？」

「まあラーメンとかかな」

何もラーメンが一番とか他の麺類が好きじゃないとかじやないけど、なんとなく出てきたのがラーメンだつた。勉強で疲れたりすると食べたくなるのだ。

「なつ…………！」

そんな驚かれるとは思わなかつた。

「次は私だね。うくんどうしよう……」

「遠慮は無しだぜ。僕に答えられることならなんでも聞いてくれ」

「…………そうだ。質問じやないんだけど……もつかい頭撫でてくれないかな？」

「僕としてはまつたくもつて構わないというか喜んでつて感じだけどいいの？」

「あのふわあくくく感じが何か知りたくて！」

「よしわかつた。任せとおけ！」

結局またふわあくくくだつた。

「…………」

「郡ちゃん。次は君の番だけど」

「…………」

もう……無言で冷たい目線を向けられている。この子に関しては僕に対する態度が一変として変わらない。これでもかと敵意を振りまいている。

「千景、何か質問しないのか？」

「乃木さん、あなたは黙つていて」

「う……すまない…」

乃木が一番かわいそうだつた。

さて彼女たちに自己紹介してもらつて今度は僕が一人ずつの質問に答える形式でそれが一巡したわけだけど

これこの世界のこと何もわかつてない気がした。

阿良々木暦は終末世界を知る。其ノ壱

結局特に収穫のないまま中学生勇者？たちとの邂逅は終わつてしまつた。

そして今、僕は大社とかいう謎の組織の迎えのバスに揺られながら窓の外を眺めている。

「驚きました？」

「…そりやね」

このバスには僕以外にももう一人同乗者がいる。僕の隣の席で柔らかな笑みを浮かべている上里さんだつた。

そして驚くというのは十中八九アレのことだろう。

「アレが大社の方々の正装なんです。確かに驚くのも無理はないですよね」

迎えが来たと思つたらそれがまさかの仮面野郎だつたのだ。いや仮面で。しかも話し方も妙にかしこまつてなんだか氣味が悪かつた。服装だつてアレはあるで…：

「神主みたいだつたけど、なんなんだい？あの人たち」

「私の口から詳しいことを話すのはできませんけれど……それはある意味正解です」

「？じゃああの人たちは神社に勤めてる人つてことか？にしたつてあそこまでのはよつほどみないと思うけど…」

なにせ巫女さんのバイトがある時代だ。戦場ヶ原が言うには年末年始なんかは結構いい待遇が受けられるらしい。

「そういうのも諸々含めてきつとお話がありますよ」

「諸々…ね。君たちのこともあちらさんから教えてくれるつて事でいいのかな」

色々と、というか気になるところがありすぎるけど、その中でも彼女たち六人の中学生のことは今一番の謎だ。大社の仮面やろうからこれでもかというぐらい持ち上げる口調で話されていた彼女たちは皆『勇者様』と呼ばれていたのだ。

そして去り際には『世界をお守りください大変感謝いたします。今

後ともどうか私たち、そして神樹様をお守りくださいませ』なんて事を言つていた。

守る？世界を？果たして何から…

おそらくはあの白い化物たちからは思はうがそもそもあの化物たちはなんなのか…ここはどこなのか。あの空間は一体何か。神樹様とは…

今の僕にはわからないことだらけで思うように頭の整理もできやしない。

「はい。相手から情報を得ようと思つたらまずはこちらがある程度の情報を提示するのが礼儀ですから」

「……」

うん…何も間違つたことを言つてないと思うしそれこそ僕自身が先程それをしようとしていた。（まったくうまくいかなかつたけど）だけどこの子はきっとそういうのが上手い子だ。決して中学生だからとか女の子だからみたいな理由で侮ることはできない。できやしない。

こんな僕でも危機察知能力ぐらいは正常にある今は普通以上に働いていると思いたい。てかほかに欠陥部分が多いのだからそのぐらい働いてくれ。

「ただーー私の身分だけでもとりあえず話しておこうかと思います」

「……」

何故?と言いたくなるのを抑えて彼女に視線を向ける。教えて貰えるものは教えてもらつておこう。

「私は初代勇者『乃木若葉』の導き手でありーー巫女の一人です」

上里さん……大社でバイトしてんの?

「どうもつと。安芸真鈴です。あなたが噂の不審者もとい阿良々木暦さんですか？」

「ツツコミたいところはあつたけど確かに僕が阿良々木暦なのは間違いないよ。ツツコミたいところはあつたけどね」

その後バスは無事に目的地にたどり着き僕は広めの個室のような部屋に移された。少なくとも僕の部屋よりは広い。

ちなみに僕は無一文で所持品すら何もない状態なので結構空き時間暇だつたりした。

そして数分後

亜麻色の髪を三つ編みにし、そばかすが特徴的な安芸真鈴さんはいきなりそんな人聞きが悪いことを言いながら入室してきたのだった。

そして彼女は巫女装束のようなものを着ていた。君も大社でバイトしてるの？

「ツツコミたいところつて…どこよ？」

「不審者の部分だよ。まあこの状況じゃ無理なことだとはわかってるけど、僕自身としてはやっぱり否定しておきたいところではあるからね」

そして即効だタメ口になつてきやがつた。今の僕は中学三年つて事でサバ読んでるから仕方ないけど。

「でも初対面の女子の、それも怪しまれてるはずな側が頭を撫でるなんて不審者だと思わない？」

「それはお互い合意の上でのやりとりだつたよ。ウインウインのやりとりだつたわけさ」

「ふーん」

訝しげな目を向けられる。しかし郡ちゃんとは違つて本気で思つているわけではなさそつた。

「ま、今は別にいいか。てなわけで改めて自己紹介。大社の巫女で勇者『土居球子』『伊予島杏』の導き手つてことになつてる安芸真鈴です

よ。 よろしく

「ああよろしく安芸。 ……それにしても巫女つてなんなんだ？ 導き手つてのもよくわからないし…バイトとかのじゃなくてガチの巫女さんなのかな…………？」

「ガチもガチ。 大マジですけど？」

「マジかよ!!」

さつき上里さんが言っていた時には唐突だつたこともあり今思えばバイトかな？なんて失礼なことを考えてしまった。

まさかマジの巫女さんだとは…

「別にそんな驚くことでもないでしように」

「いやいや、 安芸。 お前は何を言つてるんだ。 巫女さんだぞ？ メイドさんと並び立つコスプレの二代王道の一つで可愛い女の子に来てもらいたい服ランキングにおいて長年トップに君臨し続いているあの巫女さんだぞ？」

「君こそ何言つてんの？ 不審者というかただの変態じやない」

「おいおい僕は世の健全な男子たちの心の声を代弁しているだけだぜ？」

「世の男子つてみんなそんなこと考へてるの？」

「当然だろう」

「そんな堂々と言われてもねえ……大社には結構な数の巫女がいるけど」

「聞き捨てならないセリフだな。 ここは桃源郷か何かなのか？」

「桃源郷ではないけど、 神樹様のお側つて意味では多少はあつてるのかもね」

数多くいるという本物の巫女さんたちに想いを馳せつつあつた僕は『神樹様』という言葉に耳を反応させた。 それは僕を迎えてきた大社仮面が言つていた言葉もあつた。

『神樹様と私たちをお守りください』

僕はこの言葉にこの世界のことを読み解く鍵があるのではと考えた。 そして今再び安芸の口から神樹様と言う言葉が出てきた。 少々強引だがここから——

「安芸、僕は記憶喪失なんだ。この世界の常識を何も知らない。だから君が教えてくれないか？」

この世界の謎を解き明かそうじゃないか。

「ふうん。ま、いいけどね」

「いや驚けよ!?」

せつからく僕が自力でシリアルスを作ろうとしたのにまたやり直しじゃないか！

「驚いてるわよ。驚いてるけどそれよりもこの人変態だなあつて思つてそつちの方を心配しちゃつてさ」

「記憶喪失の方を心配しろ！」

僕が頑張って腹芸してる意味をなくすな！不審者から進化してるじゃねーか！

「あ、あとそのアホ毛なんなの？めちゃくちゃ動き回るけど神経通つてるとか？」

「人の話を聞け！それからこれは阿良々木家の遺伝子だ」

「変態の印とかじやないの？」

「そんな印あつてたまるか！」

「わかったわよ、阿変態君」

「人の名前を「あら、大変」みたいに噛むな！…というかそれは八九寺の芸風じやねーか！」

「誰よそれ」

「僕が愛する小学五年生の少女だ」

「やつぱり変態じやない」

「愛に年齢は関係ないんだぜ？誰がなんと言おうと僕のこの気持ちを止めることはできやしない！」

「誰かが何か言う前に法が許さんわ」

「くそつ！斯くなる上は法に代わつてもらうしかないようだな…」

「記憶喪失宣言するとき以上のガチな顔しないでよ…気持ち悪いなあ」

「そんなに褒めないでくれ」

「変態でドMとか救いようがないじゃない。マジでこのまま何も教えずに警察に突き出した方がいい気がするんだけど」

「おいおい自慢じやないが僕はそれなりに警察にお世話になつたことがあるんだぜ?」

「マジでなんの自慢にもならないじゃない。本気のやばいやつじゃない」

「断つとくが別に逮捕されたわけじゃないからな」

「信じられるとでも?」

「頼む! 僕とお前の仲じやないか!」

「初対面ですけど」

「友達に時間は関係ないって僕の恩人が言つてたぜ?」

「その恩人はなんでこんな変態に恩を与えたやつたのかしら」

「羽川に文句があるなら黙つては聞けないな」

「だから誰よ、それ」

「人類最高のおっぱい委員長だ」

「死ねば?」

阿良々木暦は終末世界を知る。其ノ式

僕はここ最近少女趣味、いわゆるロリコンというものだと思われている節がある。

全く心外だ甚だしい。しかしこれはあくまで僕のことであつて世の男性の方々の趣味嗜好を否定する意図は一切ない。

しかしこれは小さい女の子が嫌いとか苦手とかそういうわけでもない。言つてしまえば好きだ。可愛い。あと尊い。

この世の宝なのは間違いない。ただあくまでそういう対象にならないというだけで。

八九寺は結婚したいと思うこともあるけどそれもいわゆる性的な意味じやないし、忍はパートナーではあるけどそれもやっぱりそつち系の意味じやない。風呂には一緒に入るけどね。斧乃木ちゃんは言つてしまえばただの友達?だし。なんか困った時とか窮地に陥つた時に颯爽と駆けつけて助けてくれるタイプの友達。

ほら、やつぱりロリコンじやない。

そして彼女たちの外見年齢は忍8歳、八九寺10歳、斧乃木ちゃん12歳だ。実年齢は僕よりも年上だつたりするのは無視するとして皆んな小学生までの年齢で構築されているのが僕の生活の中に根付く小さい女の子たちなのだ。

つまり何が言いたいのかというと

中学生つてロリコンの対象になるのか否か。

これは性的な意味ではなくとも小さい女の子を愛している僕からしたらとても大事な、由々しきといつてもいいぐらいの問題だ。

「それで僕の恩人である羽川に前に聞いたことがあるんだ。ロリコンの定義つてなんなんだ?ってな」

「その羽川さんつて女性なんだよね?」

「ああ、三つ編みメガネ委員長の名をほいままにしていた最強委員長だ」

「なんてこと聞いてんのよ」

「いや、だつて羽川だしさ」

「：私はその羽川さんのこと知らないからさ、君とその羽川さんの関係は詳しくは知らないし聞こうとも思わないけど…ねえ……」

「まあ待て。お前の言いたいことはなんとなくわかる。僕だつて良識を持ち合わせた青少年だ。条例で保護されている」

「保護されなくていい気がする」

失礼な物言いは綺麗にスルー。これも話術の一つだ。戦場ヶ原が言つてた。

『そうだね、簡単に言つちやうと13歳以下の女の子がその対象のかな。もつともこれはアメリカの精神医学の診察基準なんだけどね。だから一概に決めちやうのはなかなか難しいんじゃないかな』

『なるほど。さすが羽川、お前はなんでも知つてゐるな』

『なんでもは知らないわよ。知つてることだけ』

「つまり医学的には中学生はロリコンには含まれないってことだ」「でも中1つて13歳でしょ？」

「そこはまあ臨機応変に対応つて事で」

「便利な言葉ね」

「つまり何が言いたいのかというと、僕だけの意見じややつぱり決めつけられないから他の人の意見も聞きたいと思つたわけなんだよ」「ふーん」

「で、どうだ? 1女子中学生として意見を聞かせてくれ」

ほんとは男子高生の僕からしたら妹以外の女子中学生からこんな意見を聞ける機会など滅多にないことだ。こんなチャンスを逃す機会はない。

「あのね」

「ああ」

「知るか」

「じゃ、とりあえず簡単に説明しようかな。不本意だけど」

「女子に冷たくあしらわれるのは慣れている。どんとこい」

「…もうツツコまないから。……この世界の今の現状はわかる?」

「さつぱりだ」

「うーん…そこからか」

「まずかつたか?」

「いや、いいよ。えとね簡単にいうと今世界は終わりかけるの」

「ああ」

「…驚かないのね」

「あんな化物を見せつけられたんだ。少しは耐性もつく」

ここに来る前の数ヶ月の間でいろんなことが起きすぎていたしな、いいこともあれば、悪いこともあつた。未だに未解決なものもある。「これは三年前突如として空から人類の敵『バー・テックス』が飛来してきたから」

「バー・テックス…」

それがあの白い化物たちの名前か。確か意味……頂点とかそんな感じの意味だつたはず。少し前の僕なら確実に知らなかつた単語。羽川万々歳だな。

「それはまた、皮肉のこもつたネーミングだな」

「まね、それはアタシもちよつと思うよ」

苦々しい顔をする安芸。どうやら意味はそれであつているぽい。

「んで世界中の人類は当然対抗しようとした。でも従来の兵器がバーテックスに効くことはなく人類たちは蹂躪されていった」「でも蹂躪されるだけではなかつた。一部の土地の土地神がバー・テックスから身を守る結界を張つて身を守ることができた地域ができた。それが今アタシたちがいる香川県を含めた四国の四県つてわけ」

「え、僕今四国にいるの?」

「え、そこ…？」

「僕自分がどこにいるのかもよくわかつてなかつたから」

「そりやまあ…重症ね」

「どうか本当に四国だけなのか？ほかの都道府県とか、ほかの国は…」

「あるにはある。長野県の諏訪というところに一人の勇者と巫女がいてそこを守つていた」

「守つて…いた…？」

「諏訪先程の戦闘の少し前に通信が途絶えたの。結界が破られてバー テックスの大軍勢が押し寄せた。大社は諏訪を正式に陥落したとしたわ」

「…その勇者と巫女っていうのは…」

「あの子達や私と同じ中学生の女の子よ」

「…」

握っていた拳に力が入り思わず顔を背ける。

中学生の女の子が一人で……そんなのつて。

「変態のくせに優しいわね」

「何も言つてないだろ」

「わかりやすいのよ」

ポーカーフェイスは未だに苦手みたいだ。今度特訓しておくことにしよう。

「あとは北の大地と南の島から微かな生存反応があるって話だけど今 のところ確かめる手立てはなし。生存反応があるってことは勇者がいる可能性が高いって話だけはあるけどね」

「なあ安芸」

「なに？」

「勇者つてなんだ」

「…神樹様が選んだ清らかな心を持つた少女だけがなれるバーテックスに唯一対抗することができる人類を守る存在……つてとこかな。そしてその神樹様の声を聞くことができるのが私や上里ちゃん巫女つてわけ。もつとも声を聞くつてのもなにか直接語りかけてくれ

るみたいなことじやなくて頭の中にポツンと降つてくる感じなんだ
けどね」

「頭がパンクしそうだ…」

「無理もないよね」

「上里さんにも言われた」

「へえ上里ちゃんが」

「なにかおかしいのか？」

「阿良々木君みたいな不審者とよく話したなあーって」

「お前はなんてことを言うんだよ」

「あの子結構しつかりしてるところはしつかりしてるからね。大切な人達の前に急に現れた不審者の阿良々木君がなにを及ぼすか警戒してるんじゃないかと思つて」

…………まあ警戒はされてたよな。たしかに。郡ちゃんの警戒心が強すぎてあの時はそこまで感じなかつたけど、ここにくる時のバスの中でもちよつと探りを入れられてる気もしたし。

「それで、ほかに聞きたいことあつたりする？」

「あの…なんて言つたか……樹海とかいうのは」

「バーテックスが四国全土を覆う結界を超えてきたときに神樹様が創り出すバトルフィールドみたいなものよ。樹海のおかげで結界を超えてきたバーテックスが一般人や街を襲うこと阻止することができるし、樹海がある間は樹海の外の時間は止まっているから生活の影響もないってわけ」

「あの不思議空間はそんな便利なもんだつたのか」

鮮明に脳裏に焼き付いているあの見たこともない光景、あんなの普通に生きてたら見ることなんて絶対にはずだ。

僕に普通なんて今更かもしれないけど。

「便利つちや便利だけどね…」

「なにか悪いことでもあるのか？」

「樹海がバーテックスの攻撃で大きく傷つけられたり損傷したりするとそれが現実の世界にも影響するのよ」

「さつき生活への影響はないって言つたのに」

「言葉の綾よ、綾」

「影響つてのは」

「不自然な事故や災害が起きる、みたいなことは聞いてるけど詳しいことは私も」

「……なるほど」

漠然とではあるが一応状況把握をすることができた。なんだかより問題が増えた気もするけど。

そしてもう一つはつきりさせたおきたいことがある。

「安芸——僕はどうなる」

僕の今後の立場だ。

真剣な顔してなんだけどぶつちやけ結構心配だつたりする。郡ちゃんとか安芸じやないけど僕だいぶ不審者なんだよなあ。

「…………」

そんな真顔になる？俄然不安なんだけど。マジで警察行きとかないよね？

「ま、そちらへんは大社のお偉いさん方が決めることだからね。アタシからはなんとも」

「ふうてつきり警察に突き出されるかと思つたぜ」

「私個人としてはそれもいいと思うけど、大社が絶対にそんなことしないでしようね。あなたを手放すことはないでしようよ」

安芸個人がそう思つているのは置いておくとして……

「なんでそう思うんだ？」

「一つは情報漏洩を恐れてかな。こんなご時世だから勇者のことなんかは世間一般にも比較的知られてるけどバー・テックスとか神樹様、樹海のことなんかは知られていないことも多い」

「それを僕が知つてしまつた——と」

「そゆこと。言つてしまえば今四国は大社による情報操作が働いてくるからね。四国トップの組織つてわけ。下手に口外しようとしたらどうなるかわからぬわよ？」

「安心しろ。口外するような友達がいないからな」

別に友達が全くいないわけじゃないのになんか知らない世界に来てしまつたせいでそもそも物理的に不可能なのだ。悲しい。女子中の学生の知り合いが増えたつて八九寺に自慢してやりたいのに。

「…………」

「おいこら。黙るな」

「んでもう一つが戦力増強つてところかな」

スルーしやがつた。

ん？ 戰力？ 誰が？

「僕を大社がとどめておくことでなにか戦力増強につながるのか？」

僕にできることなんてたかが知れてるけど。というかできないことの方が絶対多いし。

「普通に君自身が戦力なんだけど」

「は？」

「は？ と言われましても」

「なんで？」

「だつて君樹海の中で動けるし、聞いたところバー・テックスとも戦つてたわけでしょ」

脳裏に浮かぶのは吸血鬼パンチや吸血鬼スピノンをしながら逃げ惑う僕の姿。お世辞にも戦えているとは思えないのだが…

「言つたでしょ。そもそもバー・テックスと戦つてダメージを与えられている時点で貴重な戦力なのよ。それでどうしてから知らないけど君にはそれができる」

「あー…………」

おそらくというか十中八九忍の一々一鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼の怪異の王としての力のおかげなのはいうまでもない。

流石に口に出しては言わないけど。

自慢じやないけど（ガチで自慢じやない）僕戦つて口クに勝つた試しがない気がする。特に最近は影縫さんと戦つた時なんて今よりも吸血鬼性が戦つたのにそりやもうボロボロにやられてたし。正直ちよつとトラウマだつたりする。ハートキヤツチ（物理）をやられた時は流石にビビつたぜ。ハトプリを見る目が変わつちまつた

らどうしてくれる。

「君がどれだけ強いとか弱いとかは知らないけどね…酷な」と言うと悪いけど選択肢はないんじゃない?」

「選択肢?」

「君大社の庇護を受けずに生活していくあてあるの?」

「……」

無一文はつらいよ。

阿良々木暦は終末世界を知る。其ノ参

「知らない天井だ」

あの時のシンジ君はこんな気持ちだつたのだろうか。……言葉にできないけど確かにわかる不安というか辛さというか——よりありきたりに言うとストレスとかそのようなものである気もする。要は疲れたということだけだ。

「…はあ」

思わずため息が出る。あのあと僕は上里さんと一緒に夜も更けてから帰途についた。

帰途、と言つても僕は始めてきたようなものなのだけど。

四国は香川県丸亀市、丸亀城。

僕は決して歴史が得意ではないし、城マニアでもないのでこの城に関しなにか思うことはない。せいぜい石垣が立派だなあぐらいだ。これに関してはマジで立派だけど。昔の人つてのはすごいもんだ。

忍がいたら色々と感想も聞けて面白かったかもしねれない。

上里さんの話ではここを改築して六人の女の子たちが暮らせるようにならしめたらしい。学校設備も備わっているみたいでちゃんと毎日授業もあるらしい。

世界を守る勇者でも義務教育には勝てないわけか。

上里さんから自分の部屋になるらしい鍵を受け取つて多少の躊躇もありつつ部屋へと入つた。まあ普通のワンルームって感じ。

寮制の学校だつたらこんな感じの部屋なのかもと思つたりした。

そして部屋に入つて完全なるプライベートな空間を得たことによつてだつた疲れが出てきたらしい。思わずベッドに背中から寝転がつてぼーっと天井を見上げる。

で、冒頭に戻つてくるわけだ。

エヴァの最終章が公開するまでに戻れるだろうか…? 一時期真希波の可愛さに心を苦しめられどうにか結婚する方法を模索していた僕としてはなんとしても見たい。

真希波が実年齢は結構おばさんとかそんなの知つたこつちやない

！むしろ萌えるじやねえか！

「風呂入つて寝よ」

問題は山積みだし色々と考えなればならないこともある。しかしそれも急速あつてのものというものの……実際は普段以上に吸血鬼化してるものもあってこの状態で徹夜するぐらい大したことはないのだが、体と心の疲労は必ずしも規則的ではない。

『阿良々木君昨日徹夜したでしょ？』

「え、なんでだよ』

『表情には出でないんだけどね、ここ最近ずっと阿良々木君の家庭教師してるからね。不思議とわかるんだよ』

『おいおい羽川。そんな家庭教師もののAVみたいなこと言つて僕を悶々とさせてそれを糧に勉強の集中力をアップを図る作戦なら通用しないぜ。なにせ僕はそもそも羽川にマンツーマンで勉強を教えてもらっているこの段階で既に悶々としてるからな』

『とりあえず集中してね？あと徹夜禁止。いくら吸血鬼性のお陰で夜が強いからってダメ』

『羽川の言いたいことはわかるけどさ……僕は周りに比べてかなり不利な状況のわけじyan。だつたら使えるものは使つていかなと』

『阿良々木君、体と心は比例しないんだよ？』

『僕は今こんなにも悶々としてるのにか？』

『帰ろうかなあ？』

『さあやろう。あと夜はきちんと寝るべきだよな。僕もそう思つてたところなんだ』

羽川の助言に基本間違はないからな。大人しく聞いておくのが吉つてもんだ。

というわけでサツとシャワーを浴びて用意されていたパジャマに着替える。用意いいこつた。

勇者様様といつたところか。……それは違うか。

流れで歯磨きもする。ふとこのあいだの火憐ちゃんとの歯磨き対決を思い出した。まさかの僕も妹と一線を超えるとは思わなかつたぜ。

危うくあいつのはじめの相手が僕になるところだつた。八九寺と一線を超える事よりも危ない事案だ。

歯磨きも終えて再びベッドに「ゴロン」と横になる。

寝よう、そう決めたはずなのだが皮肉にも「心と体は比例しない」という羽川の有難いお言葉がここでさえも現れてきてしまった。

「勇者……か…………」

そう――――僕は勇者になつた。

成り行きで、なんだかんだで、いつのまにか。

結局あのあと――安芸との話の末僕は一戦力としてあの子たちとともに戦うことを行承した。

その見返りにこうしてここで生活をしかも無償でさせてくれることとなつた。

有難いのやら迷惑なのやらはたまた有難迷惑なのやら。

『選択肢はないんじゃない?』

安芸の言葉を脳内で反復させる。僕に選択肢はない。その通りだ。ひよつとしたら僕がアホでバカなだけで他にやりようはいくらでもあつたのかもしれない。選択肢もやり方も、戻り方あるいは帰り方といった方がいいかもしれない。

でもそんな機転が利くことはなかつた。もうこれは正直期待すべくもないけど。

やるしかない。やるかやらなかじやない。やるしかないと。

：なんだかカイジみたいになつてる気がする。人生一発逆転でもをかけてるつもりはないけど。

しかしそめて糸口でも少しづつでも何か得られるものがきつとあるはずだ。ここで生活しながら色々と情報を知つていつてそれからまた考えればいい。

まずはこの環境になじまなければならぬ。となると………やつぱりあの勇者五人と巫女一人との関係がなによりも重要になつてくると思う。

彼女たちと交流をして信頼を得ることができれば自然と多くの情報も入つてこよう。なにせ彼女たちは世界を守る最後の砦だ。

「みんない子そだつたよな」

ふとそう呟いた。正確には呟いていた、だが。

乃木生真面目で委員長タイプ。委員長といつても羽川とはまた全然違うタイプっぽい。

上里さんは柔らかい雰囲気を醸し出したおつとり系幼馴染。ギヤルゲーのヒロインかよと突つ込みたくなる属性だぜ。

土居は天真爛漫元気はつらつなおかつうるさい感じ。お調子者でノリのいいやつ。たぶん。

伊予島ちゃんはふんわりとして落ち着きのある雰囲気だ。彼女自身が言つてたけど図書室とか本屋とかで本を読んでる姿がよく似合いそうだ。

高嶋ちゃんも土居と似て元気いっぱい感じだけど土居とはまた少し違う氣もする。しかし何が違うのかと言われたらそれもよくわからない。つまりよくわからん。

郡ちゃんは…………嫌われてるな。その一言に尽きる。女子に暴言を言われるのにはそれなりに慣れている僕ではあるがそれが年下の女子ともなると傷つくときは傷つく。……ちよつぴり興奮しそうな時もある。ちよつぴりだけな。マジで。

安芸は：いいや別に。とりあえず今度あつた時感謝しどけばいいか。何だかんだこの世界のことを大まかにしたのはありがたかったのも事実である。

「やつぱりみんない子そだつたよな」

結局そこに行き着くのだつた。

「お兄ちゃん！朝だよ！おきて～～～！」

「兄ちゃん兄ちゃん！朝だぞ！お・き・ろ！」

妹たちの声が聞こえる。というかうるさい。やかましいわ。寝かせろ、僕はここを出る気はない。

目覚まし時計とか貝木の次に嫌いだわ。

「早く起きないと戦場ヶ原さんにいじめてもらえないよ？」

「早く起きないと羽川さんのおっぱい揉めなくなっちゃうぜ？」

別に早く起きてても羽川のおっぱいは揉めないし、更生したから（たぶん）戦場ヶ原にも罵倒を食らうことはない。

「ほらほら起きろ！はい♪起きろ！はい♪」

可愛いじゃねーか。

「早く起きてくれないと鼻の穴から殺虫剤くれちゃうよ♪」

殺す気じやん！ハリポタのクルーシオじゃないだから、せめて苦しませずにアバダケダブラしてくれ。

「早く起きないと肩甲骨をへし折るぞ！」

随分とピンポイントで難しそうだな！

「お兄ちゃん！」

「兄ちゃん！」

これ以上口で言つても無意味だと察したのか布団を掴んでおもいつきり揺さぶられる。

…そろそろだんまりを決め込むのも無理があるか。

「まで妹たちよ」

「あ、お兄ちゃん起きた」

「つたくようやくかよ。全くこれだから兄ちゃんはダメなんだよ」

「いつもありがとう。なんだかんだでお前たちには感謝してる」「えへへ～」

ちよろすぎ。

「そしておやすみ」

「「……」

再び優雅に布団の中に潜り込む僕。そしてポツンと顔を見合わせる妹たち。感謝してゐるの 자체は事実だから、うん。

「「起きろ!!」」

「あ
」
さ

「らぎ
」

「お
」
て

「
」

肩のあたりを触られているのが何となくわかる。誰かに声をかけられている。ふむきつと妹たちだな。

朝起きようとしない僕を起こすのはあいつらの役目だし。

にしても今日は随分と穏やかな起こし方をするものだ。

あいつらも先の件で少しは大人になつたということか。やれやれだぜ。全く。

唐突にいたずら心が湧いてきた。なんてことはない、ただの兄妹のじゃれ合いみたいなもんだ。さわやかな朝を互いに迎えるためにも効果的なアロマセラピー。滋養強壮剤とも言える。

おっぱいを触ろう。

僕ともなればたとえ見えていなかろうが妹のおっぱいの位置程度

完璧に理解している。

寝返りをうつたと見せかけてそのままアタック。

まるで僕が妹に對して意識してるだなんて思われたくないしな、こ
こは速攻でカタをつけてしまおう。

悪いな月火ちゃん！今日の犠牲者は貴様だ！

むにゅ

あーーーーーセラピーでてる。

むにゅむにゅ

てかちよつと触らない間にあいつ結構大きくなりやがった。僕と
したことが妹のおっぱいの成長速度をバカにしていたぜ。

むにゅむにゅむにゅ

――――――ん？

とつさに目を開いた。あいつのおっぱいってこんな羽川みたいな
感じやなかつたよな？どちらかというとそれは火憐ちゃんの方で。

「……………」

「……………あはよう。上里さん」

挨拶は大事だ古事記にもそう書いてある。

ここから僕はどうするべきだろうか？とりあえずもう一回だけ揉
んでおいた方がいいかな？
むにゅ

「あつ…………ん…………」

……………神さま、神樹さま、おむねさま……お陰で僕は今日も頑張
れそうです。

香川の朝に甲高いビンタ音が鳴り響いた。そこには朝イチに女子
中学生の胸を妹の胸と勘違いして揉みしだいでいる男子高校生がい
た。というか僕だった。